



総務省 行政管理局 企画調整課 課長補佐
永田 真一 Masakazu Nagata

平成 15年 4月 総務省採用
 同 人事・恩給局総務課
 8月 奈良県総務部市町村課
 平成 17年 4月 総務省自治行政局行政課
 平成 19年 7月 同 行政管理局管理官主査
 (独立行政法人総括、外務省・防衛省担当)
 平成 21年 7月 フランス留学(モンペリエ第一大学)
 平成 23年 7月 総務省行政管理局行政手続室課長補佐
 平成 25年 4月 内閣総理大臣官邸国際広報室参事官補佐
 平成 27年 8月 現職

総務省×日本、それは世界を魅せる必然

映画「海難1890」。日トルコ共同制作が決まった、2013年10月、イスタンブール。総理随行中の私は、ボスポラス海峡を照らす花火を見上げていました。2020年の五輪開催地「東京」が宣言された時、同じく招致活動を行っていたトルコのエルドアン首相は、真っ先に祝辞を述べてくれました。応じて、安倍総理は時を移さず彼の地を訪問したのでした。



政府専用機にて総理と

2年間、官邸で世界に貢献する日本の姿を正しく世界に示す仕事をしました。これは、国家公務員本来のミッションとも言えます。そんな大きな舞台上で活躍してみたいなら、最後までお付き合いください。総務省でならなんでもできてしまう。こんな読後感が待っているでしょう。

全世界が日本に魅せられる

まず最近の仕事から。昨年10月、フィンランドのOECD閣僚級会合に出席しました。副議長を務める副大臣を支え、会議を成功させること。これが行政管理局のミッションでした。総務副大

臣出席はなんと初めて。日本の行政を国際社会にPRする好機。準備には心血を注ぎました。

「課題解決先進国として、すべての人が輝く社会へ、フロントランナーとして世界に貢献する。」高市大臣の太鼓判も得た松下副大臣のスピーチは賞賛を以て迎えられ、我が国が議長を務めた分科会が一番人気。一躍脚光を浴び、世界が魅せられました。

成功に導く鍵は何だったでしょう。国際感覚と度胸のある幹部、マネジメントに長け、場数を踏んだ上司、優秀で頑張り屋のチームのメンバー。みんなで成し遂げたのです。この組織の強みは、人材。そう実感した仕事でした。

いつでも旬な行政制度を

さて、世界の平和と発展に貢献する日本は、民主主義、法治主義の国としてアジアの先頭に立つ国でもあります。行政管理局は国の根幹に関わる行政制度も仕事の一つ。なかんずく、この4月施行の新行政不服審査法は、私も改正検討に携わりました。争訟を通じ行政の在り方をたまたす。仕組みを見直す時が来たのです。地味かもしれない。だが、忘れてはならないでしょう。明治の開国以来、法近代化の要請が如何に重大であったかを。法の支配を尊び、アジアに範を示し、世界をリードする国であらねばならない。行政制度から国家を支える気概とは、そういうものかもしれません。

なんで私が官邸に？

最後に官邸国際広報の話。仏語担当として、欧州中心に総理外遊に17カ国随行、英仏語圏との交流や仏語インタビューなど、飽くなき挑戦の連続でした。

「総理の指示だ。直ちにフランス大使館と調整できるか」

こんな時は、日頃の大使館などの人脈が問われるのです。振り返れば、仏留学の背中を押してくれた先輩・同僚たちの存在がありました。審査を通れば、人事院の派遣制度を利用した留学も可能です。この組織で培った経験が、国際社会にも通じる力となって、国を支えるのです。

とてつもない日本の真価を発揮させ、発信すれば、もっと世界はよくなる。この国、世界に貢献することをミッションに思うなら、さあ、自分の未来を今こそ変えるとき。

来たれこの夏、総務省。



フランスTV局にも「攻めの広報」

演劇→総務省？

このパンフレットをご覧の皆さんは国家公務員にどのようなイメージをお持ちでしょうか？法学を専攻しないとれない、長いこと準備をしないとれない、もしかするとそんなイメージをお持ちかもしれません。しかし私の学生生活は多くの人が思い描く「国家公務員志望者」とは遠いものでした。大学、大学院と演劇を研究し、日本の演劇近代化運動を探るため、研究室で明治時代の新聞や文献に向かう日々。ではなぜそんな私が今、総務省にいるのか？それはひとえに、総務省という組織の懐の深さに依ります。

研究から離れ、少し違う世界を見てみたいという思いで始めた就職活動。たまたま訪れた総務省で印象に残ったのは、職員の方の「行政は“何”をやるかも大事だが“どのように”やるかも同じように重要だ」という言葉でした。どんなに良い内容の政策も、適切に行わなければ高い効果をあげることはできません。政策が高い効果をあげるために必要な行政制度を整えること。それは、私が長く研究してきた演劇の分野も含め、あらゆる分野に影響を与える、非常に重要な仕事であるように思えました。

こうした、幅広いフィールドに影響を与える仕

事の奥深さは、行政について門外漢であった私にも非常に魅力的に見えました。そして、そんな私の疑問を真剣に受け止め、丁寧に説明して下さった職員の方々の懐の深さに惹かれ、私は総務省に入ることを決意したのです。

行政を考えるきっかけに

現在、私は、国家公務員制度の企画・立案を担当する内閣官房内閣人事局で、国家公務員の採用・昇任等に関する制度に携わっています。その中で、今、私が力を入れて取り組んでいるのが、志望者拡大に向けた広報活動です。

この施策の目的は勿論、より多くの学生に国家公務員を志してもらうことです。しかし、個人的には、広報活動を通じ、学生に国家公務員のリアルな姿を知ってもらうことは、最終的にその人が国家公務員を志望するか否かに関係なく、大切なことだと考えています。なぜなら、どのような道に進むにせよ、この国で生きる以上、国家公務員が行う仕事＝「行政」に影響を受けないことはない一方で、多くの人は、普段の生活で、国家公務員が何を考え働いているかを知る機会がほとんどないからです。

そうした中で、もし、説明会等を通じて、国家公務員一人ひとりの仕事に懸ける思いを知ること

ができれば、今後、人生の様々な局面で行政の仕事に向かい合う時(あるいは向かい合わざるをえない時)、それを単に、匿名の「官僚」によるものとしてではなく、一段深い視点で捉えることができるのではないかと思います。そうした意味で、この広報活動が、一人でも多くの人にとって行政をよりよく理解するきっかけとなるよう、日々試行錯誤しながら企画に取り組んでいるところです。

私の例を見てもわかるように、国家公務員を志す道、そしてその姿は決してひとつではありません。もし、少しでも公務の世界に心惹かれるのであれば、是非、専攻や年齢等で自分の可能性を限定することなく、国家公務員という道を考えてほしいと思います。総務省では、多様なバックグラウンドを持つ魅力的な人材が、皆さんをお待ちしています。



シンガポール政府主催の会合にて

多様な「国家公務員」の姿を伝えたい



内閣官房 内閣人事局 任用第一係長
土屋 絢子 Ayako Tsuchiya

平成 24年 4月 総務省採用
 同 行政管理局管理官
 (行政改革、業務・システム改革総括)付
 平成 25年 7月 内閣府公益認定等委員会事務局
 平成 26年 7月 内閣官房内閣人事局主査心得
 (任用及び人事評価担当)
 平成 27年 4月 現職